《 研究ノート 》

近世後期の庶民の旅にみる近代性

谷釜　尋徳

１．問題の所在

本稿は近世後期の庶民の旅に着目し、彼らが娯楽として楽しんだ旅の中に「近代性」を見出そうとする試みである。

従前に取り組まれた近世旅行史研究は、庶民の旅を「娯楽」としてみる視点が希薄であった。旅人が道中において如何にして楽しんだのかという興味は、これまで主に当該分野の研究を担ってきた交通史学や歴史地理学の関心事ではなかったためでもある。これに対して、広義のスポーツとは「遊び戯れること」[(1)] を意味するとの考えに立てば、庶民による旅の娯楽的側面の検討は優れてスポーツ史的な課題であるといえる。

もちろん、一口に庶民の旅といっても、近世においては娯楽を目的とした旅以外にも比較的軽侮な信仰心を発端とする宗教的な旅、商いのために諸国を渡り歩く行商人の旅、芸能人の旅、松尾芭蕉に代表される文化人の旅などがあったことを見落とすことはできない。このうち、宗教的な旅に関しては近世後期にかけて、その「信仰」をタテマエとして実際には道中の「娯楽」が主目的に

（１）　岸野雄三「スポーツ科学とは何か」『スポーツの科学的原理』大修館書店、1977 年、81 頁。
岸野は、「スポーツ」の原意を「まじめなこと（仕事）から人びとを搬び去り、非日常的な次元で、何かに没頭させることを意味し、つまりそれは遊び戯れることなのである。」（同上書、81 頁）と解し、したがって「広い意味では、ギャンブルも、レジャーも、また頭の訓練といわれるクイズも、碁、将棋、マージャンなどもすべてスポーツといえる」（岸野雄三ほか『目で見る大世界史 13 より強くより楽しく 体育・娯楽』国際情報社、1968 年、 6 頁）と指摘している。

なっていく傾向が認められる。ゆえに、近世後期におけるこの類の旅は娯楽目的の旅の範疇に取り込むことが可能になる。他方、行商人の旅、芸能人の旅、文化人の旅は極論すればいずれも「信仰」を大義名分に掲げることはなかった。したがって、本稿ではこの種の旅を主たる対象として扱うものではない。

ところで、従来の日本史研究において近世とは、「明るい」時代としての近代と対比して「暗い」時代であると見なされてきた感がある(2)。しかしその一方で、近世（特に後期）とは来るべき近代の到来を準備した時代であったと捉えることもできることから、その意味では近代人にとって「明るい」側面もみられたといわねばならない。例えば、幕府は長きにわたる鎖国政策をとっていたものの、この時代は主にオランダを通して多くのヨーロッパ文明を受容していた。無論、近代的なるもの全てを無批判に肯定することは避けなければならない。現代社会の弊害は近代が育んだものであると見なし、前近代にこそ将来を見通すアイデアがあるとの見解がスポーツ史の分野においても主張されているからである(3)。

近世文化史研究の古典として知られる阿部次郎の『徳川時代の芸術と社会』(4) は、近代的な価値基準のみをもって江戸文化の美意識を取り上げた研究であったが、阿部の近代主義的な研究視角は戦後の歴史学にも引継がれてきた。ところが、今日ではそのような学問的傾向を克服しない限り、近世文化史研究は当時の日本を規定していた固有性を理解し得ないと考えられるようにもなった。これに関しては、早いところでは高尾一彦(5)、近年では倉地克直(6)

（2）　近世史を専門とする朝尾によれば、近代歴史学を生み出したヨーロッパでは、中世から近世への移行は「暗黒の中世から光明の近世へ」と把握されている一方で、日本では「明るい中世から暗い近世へ」、「自由な中世から拘束された近世へ」という全く逆のイメージが定着しているという（朝尾直弘「『近世』とはなにか」『日本の近世 1 巻 世界史のなかの近世』中央公論社、1991 年、10 頁）。

（3）　稲垣正浩「スポーツ史研究の現代的視角を探る」『スポーツ史研究の現代的視角』水野スポーツ振興会研究助成金研究成果報告書、1991 年、3 ～ 22 頁。同「後近代社会のスポーツ」『図説スポーツ史』朝倉書店、1991 年、156 ～ 188 頁。同『スポーツの後近代』三省堂、1995 年、4 ～ 13 頁、211 ～ 242 頁。

（4）　阿部次郎『徳川時代の芸術と社会』改造社、1931 年。

や西尾幹二[7]、渡辺京二[8]によって指摘されている通りである。

しかし、日本の近代化（＝ヨーロッパ化）は巨視的にみれば「ヨーロッパの世界化」そして「世界のヨーロッパ化」のなかで起った現象でもあり、ヨーロッパが今日的な人間観や世界観を作り出してそれを非ヨーロッパ世界にまで広め、ヨーロッパの時間を共時して「ヨーロッパの世界史」を可能ならしめたことも一面の事実である[9]。その意味では、冒頭で示したように近代的な諸要素を日本の前近代に探ることは、今日において全く無価値であるとはいえない。

このようにして、「近代性」を物差しにして考えてみたとき、近世の庶民層に流行を博した娯楽の中には近代的な諸要素を看取することができる。その「近代性」を含有する傾向が顕著に現われた娯楽が、近世後期における庶民の「旅」であった。

近代以前の日本人の娯楽に近代的な要素を見出し得ることは極めて興味深いが、従来の研究において、この観点から詳論されることは稀であった[10]。そこで本稿では、近世後期における庶民の旅の中に芽生えていた「近代性」を抽出することに関心を寄せることとした。それは、とりもなおさず当時代の娯楽のなかで、「旅」が如何なる特殊性を有していたのかを描き出すことにも連なると考えたためである。ただし、その検討にあたっては、近世の娯楽を「近代的」な価値基準のみをもって把握し、その是非を評価しようとするものではないことを予め断っておきたい。

（５）　高尾一彦『近世の庶民文化』岩波書店、1968 年。

（６）　倉地克直『江戸文化をよむ』吉川弘文館、2006 年。

（７）　西尾幹二『江戸のダイナミズム』文藝春秋、2007 年。

（８）　渡辺京二『江戸という幻影』弦書房、2006 年、12 頁。

（９）　西谷修「ヨーロッパの臨界」『文藝』32 巻 1 号、1993 年 2 月、293 ～ 294 頁。

（10）　この種の稀有な研究として、後述するグートマンによる近代スポーツの 7 つの指標を、日本の伝統スポーツたる相撲（とくに大相撲）の中に探るというトンプソンの試みをあげることができる（トンプソン「スポーツの近代化と相撲」『現代社会学』24 号、1987 年 12 月、77 ～ 82 頁）。

2．近世後期の庶民の旅にみる近代性の検討

2－1　「近代性」の認識

「近代性」に関する一般的な理解を得るために、まずは「近代」に関して『日本国語大辞典』に尋ねてみると、その項目には「①現代に近い時代。」という説明に続いて、「②歴史の時代区分の一つ。広義には近世と同義に用いられるが、普通には古代、中世の後の狭義の近世につづく時期で、封建制社会の後の資本主義社会をさす。日本の場合、幕藩体制の崩壊した明治維新（一八六八年）から太平洋戦争の終結（一九四五年）までをいうのが通説。」(11) と記述されている。このようにして一般的に「近代」が理解されているのであるが、これによれば「近代」とは一つの時代区分であり、それは「資本主義社会」の登場を画期として定義されていることがわかる(12)。

次いで、「スポーツ」としての旅を念頭におく本稿では、スポーツ史の専門家によって「近代」がどのように捉えられてきたのかについて取り上げてみることにしたい。このことについて、岸野は近代の特質を「世俗化、技術化、合理化、数量化、官僚化、規格化、均等化」(13) をもって説明している。また、稲垣によれば近代を支配する時代精神は、客観主義、論理性、普遍主義、没個性的、能動的、合理主義、現実性、必然性、勤勉性、知性、反象徴性、分析的、効率主義、一義性、理性、記録化、国際主義、数量化に求められるという(14)。

ともあれ、こうした近代性を内包した「近代スポーツ」の特質を語る際に、頻繁に引かれるのがグートマンの見解である。グートマンは『スポーツと現代アメリカ』の中で、近代スポーツの特質を次の７つに見出している。すなわ

---

(11)　日本国語大辞典第二版編集委員会編『日本国語大辞典 第二版 第四巻』小学館、2001 年、690 頁。

(12)　また、『第三の波』を上梓したトフラーは、近代社会の特質は産業社会と国民国家にあるとし、この文明特有の基本的構図は規格化、分業化、同時化、集中化、極大化、中央集権化という 6 つの原則から成り立っていると指摘する（トフラー著、鈴木健二他訳『第三の波』日本放送出版協会、1980 年、71 ～ 93 頁）。

(13)　岸野雄三「スポーツ史研究の現状と課題」『スポーツ史研究』 1 号、1988 年 3 月、 5 頁。

(14)　稲垣正浩「近代スポーツの誕生とその背景」『体育史講義』大修館書店、1984 年、96 頁。

ち、世俗化、競争の機会と条件の平等化、役割の専門化、合理化、官僚的組織化、数量化、記録万能主義である[15]。

また、同書の中でグートマンは、近代スポーツを特徴づける上記７つの指標の相互関連性を説いているので、ここではそれを清水哲男の訳によってみていくことにしたい[16]。

「これらは体系的に相互に影響を及ぼしあっているのだ。記録達成のために他の諸特質が必要だったという目的論をでっちあげてもよいほどだ。記録に対する現代人の欲望は、数量化抜きの形態では考えられない。また訓練されていない肉体によって達成されるもの以上の新記録は、専門化と合理化なしに樹立することは不可能である。しかし専門化と合理化は常に官僚的な組織を内包しており、それなしでは世界選手権も開催することができず、ルールも定められず、記録も滞りなく公認されないのだ。（中略）現代スポーツの専門化、合理化、そして官僚化はまた、ある種の機会均等を当然なこととしている。仮に最も速い走者や最も巧みな剣士が職業や肌の色や宗教などの理由で競技から外されるとするならば、記録の追及は茶番めいたことになるだろう。最後に、数量化された業績という考えは、聖なる超越的世界の規準よりも、おそらくは俗なる組織の規準のほうにより適合するであろう。これは把握するのに困難な認識であり、そして多分不愉快でさえあるかもしれないが、スポーツにおける業績の力学は社会の世俗化にはじまるのかもしれないのだ。」

---

(15)　グートマン著、清水哲男訳『スポーツと現代アメリカ』TBS ブリタニカ、1981 年、32 頁。
原書においてグートマンはスポーツを“playful physical contests”（Guttmann, *From ritual to record*, Columbia University Press, 1978, p. 7.）として捉えているが、この文言は岸野によって「遊び楽しむ身体的競技」と邦訳されている（岸野雄三「転換期を迎えたスポーツ史の研究」『スポーツ史研究』10 号、1997 年 3 月、4 頁）。したがって、グートマンの意味する「スポーツ」の概念において室内の坐居的な遊戯は除外されているといわねばならない。

(16)　グートマン著、清水哲男訳『スポーツと現代アメリカ』TBS ブリタニカ、1981 年、94 ～ 95 頁。

上記引用文の「記録達成のために他の諸特質が必要だったという目的論をでっちあげてもよいほどだ」という指摘から、グートマンは記録達成への衝動こそが近代スポーツを成立せしめる最大の要素であると捉えていることがわかる。実はこの要素は、すでに日本の古代・中世の「蹴鞠」にも現われている。

蹴鞠のゲーム形態は、何人かのプレーヤーが鞠を交互に蹴って地面に落すことなく継続するパスゲームであったため、その主たる技術は鞠を正確かつ優雅に蹴って仲間に扱いやすいパスを出すことで、ゲームの興味は何回続けて鞠が上るか（鞠数）という点にあった。ゆえに、古代・中世の蹴鞠に関する史料には「鞠数」に関する記録が散見され、「数によって技を量り、その向上を楽しみ、面白さを求めるという姿勢が認められる」のだという[17]。

ところで、グートマンは上記引用において、「数量化された業績という考えは、聖なる超越的世界の規準よりも、おそらくは俗なる組織の規準のほうにより適合する」とし、「スポーツにおける業績の力学は社会の世俗化にはじまるのかもしれない」との見解を示している。ゆえに、グートマンによれば近代スポーツの誕生は「世俗化」に端を発するといわねばなるまい。

以上述べた「近代性」のメルクマールをある程度念頭においたうえで、以下では近世後期における庶民の旅の中から「近代」的な諸要素を抽出する作業を試みたい。無論、庶民の旅の中に近代の諸要素がいくら見出せたからといって、当時代の日本に「近代スポーツ」が存在したと断じうるものではない。稲垣によれば、近代スポーツとは「近代市民社会の成立や国民国家の形成期を経てじょじょにその条件整備を終え、19世紀の後半にはいってようやくその具体的な形態を明らかにしてくるスポーツ」[18] と定義されているからである。それでも、上記の試みによって近世のスポーツ文化たる旅の近代性が浮き彫りになれば、日本がヨーロッパ産の近代スポーツを受容するための下地もまた、近世社会において醸されつつあったと考えることが可能となろう。

---

(17)　渡辺融「スポーツと記録」『体育の科学』38 巻 5 号、1988 年 5 月、381 ～ 386 頁。

(18)　稲垣正浩「近代スポーツの誕生とその背景」『体育史講義』大修館書店、1984 年、97 ～ 98 頁。

2－2　江戸庶民の旅にみる近代性

ここでは、近世後期における庶民の旅に含有された近代性として、①信仰の世俗化、②異文化交流、③情報・文化の共有、④貨幣経済の促進、⑤交通手段の近代化、⑥近代的な時間意識の先取りの６項目を掲げて論じるものである。

①　信仰の世俗化

近世の庶民が旅に出るためには、原則として関所の通行を願い出る「関所手形」及び身許を保証する「往来手形」の携行が必要とされた。関所手形や往来手形には旅の行き先や目的が記されており、庶民が娯楽として旅に出る場合には、その内容は各地の神社・仏閣としておくのが慣例であった。しかしながら、それは御利益に定評のある社寺への参拝を旅の目的としておけば、手形を発行する領主側も特に咎めることはなかったからであり、そこに記された社寺は目的ならぬ「目的地」に他ならなかった。つまり、ここでいう目的地とは庶民が名目上設定したものなのである。

とりわけ、伊勢神宮は内宮に皇祖神（天照大神）を、外宮に五穀の神（豊受大神）を祀る当時としては最も御利益に定評のある場所であった。そのため、庶民は伊勢参宮を名目上の目的としておけば、幕藩領主に咎められることもなく旅をすることができたのである。

こうして、伊勢神宮をはじめ信仰に定評のある社寺への参詣を大義名分として、その目的地間の往復路（＝道中）をも丸ごと楽しむというスタイルの旅が近世後期に庶民層を担い手として流行を博すことになった。そのことは、近世後期の随筆作家である喜多村信節が『嬉遊笑覧』（1830年刊）に、当時の旅の傾向として「神佛に参るハ傍らにて遊樂をむねとす」[19] と綴っていることからも知ることができる。

この意味で、近世後期の庶民の旅は、信仰の世俗化現象のなかで流行を博した娯楽であったといえよう。

---

(19)　喜多村信節「嬉遊笑覧」(1830)『嬉遊笑覧』近藤出版部、1887 年、199 頁。

② 異文化交流

近世においては、行商人や旅芸人などを業とする者でない限り、自身の居住範囲を出ることは稀であった。そのため、当時の庶民には日頃の行動範囲を越えた世界は「異文化世界」であるという意識が少なからず働き、居住地域を越境して道中を楽しむ「旅」は庶民にとって異文化に触れる絶好の機会ともなっていたのである[20]。

幕末～明治初期に来日した西洋人は、当時の日本の文明が自らのそれとはあまりにも異質なものであったために、驚きの目をもってその特質を見聞録に記した。彼ら西洋人は、異文化を見つけることで自らの属する西洋文明の特質を自覚するに至ったのである[21]。

海の遥か彼方からやってきた西洋人の場合と同列に捉えることはできないにしろ、近世後期の街道筋でもこれと同じようなことが少なからず起っていたのではなかろうか。当時代の庶民にとって、道中は異なる文化圏に属する「異文化世界」であった。それゆえに、「異文化」の発見を通じて、彼らは自らの居住地域の文化を相対化し、その独自性を確認することが可能になったのではなかったか。「百聞は一見に如かず」というが、道中で絶えず繰り返される実体験は書物や風聞などによって得た知識を凌駕し、彼らに「新たな眼」を開かせたに違いない。庶民が道中で多くの楽しみを享受するということは、彼らの自覚の有無はともかく、「遊ぶ」ことを通して異文化に接し、そのことによって自らの文化圏を再発見することにも連なっていたように思える。

---

(20) 当時の社会が地域ごとにいわば閉ざされた空間であり、それぞれの異空間に生きる者同士が、互いの異文化に触れる機会を提供していたのが「旅」であった。文化 7（1810）年に八隅蘆菴が著した『旅行用心集』には、他国では言葉や風俗も異なるのは当然のことなので、これをおかしく思って嘲笑しては災いの元になるという内容の戒めが記されている（八隅蘆菴「旅行用心集」（1810）『旅行用心集』八坂書房、1972 年、30 ～ 31 頁）。本稿においてもこうした視点に立脚して、近世を地域間における文化の相違が顕著にみられた時代として把握し、その交流を促した最たるものが「旅」であったと考えておきたい。なお、近世の日本において東西の文化に明確な「差異」がみられたことは、中世史家の網野によっても指摘されている（網野善彦『東と西の語る日本の歴史』講談社、1998 年、308 ～ 309 頁）。

(21) 渡辺京二『逝きし世の面影』平凡社、2005 年、19 頁。

近代に入り文明開化の波が押し寄せると、国内のみならず海外の異文化世界との交流が活発になったことは周知の通りであるが、近世後期における庶民の旅も異文化に触れて楽しむものであったことを考えると、この旅は近代を先取りした娯楽としても位置づけることができよう。

③　情報・文化の共有

近世という時代にあって旅という娯楽は、ただ単に当人が楽しんだことにとどまらず、それと同時に道中の行く先々に情報を運ぶ役割も担っていた。近世においては、人と物流の移動（＝旅）によって情報の運搬がなされていたからである[22]。このように「情報」という観点からみると、近世は現代の情報化時代の基盤ともいえるインフラを準備した時代であったといえるが[23]、その情報は「旅」という行為によってもたらされたといっても過言ではなかろう。ここに、旅の含み持つ「メディア性」の一端を垣間みることができる。

また、近世初頭の江戸においては、江戸の都市建築に起因して労働力需要が激増した。これに目を付けた諸国の人々が江戸へ多数流入し、江戸は巨大な人口を抱える商業都市として発展していくことになる。天保14（1843）年の江戸の人口調査では、江戸生まれが70%、江戸以外の出生者が30% という結果が提出されたが[24]、この数字から近世後期の江戸にはいかに多くの流入者がいたのかが読み取れよう。

ここでは、彼ら流入者が江戸に至るまでには少なからず在地～江戸間の距離を移動（＝旅）してきているということに注目しておきたい。江戸の都市化という現象は都市への人々の流入の手段としての「旅」という行為を抜きにしては語れないのである。

ここで、前近代のドイツで顕著にみられた職人の遍歴の旅について触れてお

(22)　中田節子『江戸びとの情報活用術』教育出版、2005 年、27 頁。小野武夫『日本村落史概説』岩波書店、1936 年、319 頁。

(23)　市村佑一『江戸の情報力』講談社、2004 年、 4 頁。

(24)　藤田覚「江戸庶民の暮らしと名奉行」『日本の時代史 17 近代の胎動』吉川弘文館、2003 年、241 頁。

きたい。ドイツの遍歴は各都市における人口増加が頭打ちになり、都市経済の規模が拡大し得なくなった段階で同職組合が親方株を一定数に限定したことに端を発している。この親方株の限定によって、当分親方になる見通しの立たない職人が町に溢れ、由々しい事態を招いたために遍歴という手段が考え出されたのである。この遍歴は14世紀末から20世紀頃にかけて行われ、修行を終えた職人は親方昇任審査をうける前に1年から7年程の期間をかけて諸国を旅することが義務付けられた。中世ヨーロッパ史を専門とする阿部は、遍歴によって各地から職人が集まった小中都市が異文化交流の場となり、言語、民俗、文学といった文化の共通の基盤が形成されたという見解を示している(25)。つまり、ドイツでは職人の「旅」が近代化の端緒となっていたのである。

この「文化の共有」という点に着目してみても、近世の日本において旅によって類似した現象がもたらされていた。とりわけ「言語」についてみると、主に江戸庶民が話したとされる「江戸語」は後の共通語のベースとなる言語であったことが指摘されている(26)。したがって、江戸庶民の旅は各地に都市文化としての「江戸語」を散りばめ、来るべき近代にこれが共通語となりうる種を蒔いていたことになろう(27)。近世においては、現代のようにテレビや新聞などを介して全国津々浦々の人々が常時情報を「共有」することは物理的に不可能であったといってよい。したがって、近世において言語をはじめとする文化を諸国に伝播し、共有し合ったという意味においても、旅は極めて近代性を内包する娯楽であったといえよう。

④　貨幣経済の促進

近世後期の旅の中に近代性を見出そうとするとき、貨幣経済の促進に関わる

(25)　阿部謹也『中世を旅する人びと』平凡社、1978年、190～191頁。

(26)　松村明「序」『江戸語の辞典』講談社、1979年、4～5頁。

(27)　文化が伝播するということは、往々にして「旅」と深く切り結びついているものである。現存最古の木造建築である法隆寺のエンタシスといわれる柱のデザインもギリシャの神殿に端を発しており、シリア、ペルシャ、中国という「絹の道」を旅して日本に辿り着いた建築技術であったといわれる（岩井宏實『旅の民俗誌』河出書房新社、2000年、8頁）。

問題も看過することはできない。江戸文化・風俗研究家として知られる三田村鳶魚は、旅がもたらした世の中の変化を「食」に着目して論じ、旅という行動において必要とされた現金を介して食事を得るという行為が、貨幣経済が広範に流通する契機になったという見解を提示している[28]。

先にみたように、「近代」は資本主義社会を念頭においた時代区分であったが、この社会構造は貨幣経済を前提としている。したがって、街道筋に至る貨幣経済の促進を手助けした「旅」は、近代という時代の到来を促したといってもよい程の意味を持つものであったと、ここでは位置づけておきたい。

⑤　交通手段の近代化

幕末期における街道筋の交通手段についても近代の萌芽を認めることができる。日本の陸上交通史において、明治期以降普及する人力車の先駆的形態をなす「人を乗せる車」の登場は近代の幕開けを意味していた。この種の車は、封建制下において制度上は禁止されていたからである[29]。ところが、幕末期の庶民の旅日記をみると、街道筋で荷車に旅人を乗せて運ぶことが営業化していたことがわかる。

その好例として、文久２（1862）年12月に鹿田村（現・群馬県笠懸町）を出立し、翌年正月まで53日間をかけて伊勢参宮の旅をした田中喜宗治の旅日記『伊勢参行紀行』をみておきたい。田中喜宗治は文久３（1863）年正月12日に、東海道桑名宿付近で旅人を乗せた車を目の当たりにした模様を「桑名海道ニ而旅人ヲ乗セ賃銭ヲ取テ稼…」[30] と書き綴っているが、文中に「賃銭ヲ取テ稼」とあることから、これが営業として行なわれていたことがわかる。

類似の記述として、文久３（1863）年正月から３月まで阿見村（現・茨城県阿見町）から62日間の伊勢参宮の旅をした野口市郎左衛門の旅日記『道中日記

(28)　三田村鳶魚「江戸の食生活」『三田村鳶魚全集 第十巻』中央公論社、1975年、123～124頁。
(29)　谷釜尋徳「幕末期における旅人の移動手段としての荷車の登場」『日本体育大学紀要』36巻２号、2007年３月、197～208頁。
(30)　田村喜宗治「伊勢参行紀行」(1863)『笠懸村誌 別巻三 資料編 近世史料集』笠懸村、1989年、254頁。

帳』において、正月26日に「池鯉鮒より鳴海迄車ニ乗る、百文ツヽニ而四人のる、随分午よりはやい」[31] と記されているものが見受けられる。彼らは東海道池鯉鮒から鳴海まで「車」で移動しているが、この車には少なくとも 4 人乗車することができ、賃銭は 1 人につき100文であったことがわかる。また、「随分午よりはやい」という一文からして、多少速度を出して運搬していたとみえる。一行がこの車を見た時期が、前述の田中喜宗治の事例と 2 週間ほどしか違わないことからしても、この時期の東海道において旅人の移動手段としての荷車は広く普及していたことがうかがえよう。

⑥　近代的な時間意識の先取り

旅の「近代性」に関する事柄として、近世後期における旅人の時間観念（＝意識）の問題に触れておくことにしたい。太陽の位置を基準とする「不定時法」が用いられていた近世において、旅人は日時計を持参して「時間」を意識した旅を心掛けていたが、道中の時刻に関する情報を彼らに知らせる役割を果たしていたのは主に時鐘（時の鐘・寺の鐘）であった[32]。

無論、近世後期における旅を、近代社会において顕著にみられるような時間による秩序性に従った旅と同列に論じることはできない。鉄道を利用した近代的な旅では、汽車の発車時刻に常に制約されざるをえないが、近世後期の旅はそのような近代的時間観念にまだ完全に支配されてはいなかったためである。しかし、道中で時刻を意識していたという点において、この旅もまた「近代性」を帯びた娯楽になりつつあったとみなすことができよう。

社会哲学・社会思想史を専攻する今村によれば、不定時法に基づく前近代の時間意識が自然の流れによる「円環時間」であるのに対して、近代的な時間意識とは「未来を先取りし、先取られた内容で現在の状態を変更し、計画を立て

(31)　野口市郎左衛門「道中日記帳」(1863)『阿見町史編さん史料集（四)』阿見町史編さん委員会、1980 年、120 頁。

(32)　谷釜尋徳「近世後期の庶民の旅にみる歩行の実際」『スポーツ史研究』20 号、2007 年 3 月、1 ～ 22 頁。

て未来にそれを現実化していくように人々を促す」ものであるという[33]。また、今村は「伝統的な円環時間の中には過去と現在しかない」とし、この自然の運動に依拠した時間意識が壊れて、直線的な過去にも未来にも現在にも開かれた時間意識が生まれてくるとき、はじめて「時間意識の近代」が到来すると指摘している[34]。近世後期の庶民の旅においても、こうした近代的な時間意識が芽生えていた可能性があった。

近世後期の庶民は、社寺への参詣を名目上の目的としながら滅多にない旅の機会により多くの異文化に触れて見聞を広めようとしたため、彼らの旅の日数は次第に増大する傾向を示していった。そのため、庶民の旅に一定の日数制限を加えて、これを規制する藩があらわれたといわれている[35]。庶民がこうした藩による制限を厳守していたのかは定かではないが、旅が長期間に及べばそれ相応の経済的な負担を負わねばならない。したがって、庶民の旅の日数は諸藩による規制の有無とは別に、その経済的な事情から自ずと制限されていたと類推される。それゆえに、庶民は限られた日数のなかでより多くの異文化に触れるべく事前に用意周到な計画を企てていたに違いない。

しかしながら、旅の道中では天候等の事情によって途中で足止めをくうことも想定しておかねばならなかった。その場合、旅人は現状を把握したうえで「未来を先取り」し、道中の計画を練りなおす必要があったことは言うまでもあるまい。このようにしてみると、近世後期における庶民の旅は、来るべき近代に先立って「近代的」な時間意識をもって行なわれたとみることができる。この点においても、彼らの旅は近代を先取りした「スポーツ」現象であったといえそうである。

３．おわりに

繰り返しになるが、本稿は近代的な尺度のみをもって近世のスポーツ文化を

(33)　今村仁司『近代性の構造』講談社、1994 年、239 頁。
(34)　今村仁司『近代性の構造』講談社、1994 年、63 ～ 64 頁。
(35)　新城常三『新稿 社寺参詣の社会経済史的研究』塙書房、1982 年、815 ～ 821 頁。

再評価しようとするものではない。しかし、今日的世界観を作り出したヨーロッパ的（＝近代的）な価値基準に照らしてみても、近世後期における庶民の旅の中には、近代スポーツのメルクマールのいくつかがすでに芽生えていたことが確かめられよう。

明治維新を迎え、極東に位置する日本でもヨーロッパ近代の時間を共有することになると、その数量的合理主義によって編み上げられた「近代スポーツ」（＝競技スポーツ）が随時移入されるようになった。しかし、それ以前にも近世後期の庶民の旅には、近代的諸要素を確かめることができる点は注目される。旅の検討を通して一つの仮説を提示するならば、少なくとも近世後期の日本には近代スポーツを受容し得る下地が整えられつつあったと結んでおきたい。

［付記］

本稿は、科学研究費補助金・若手研究（B）の助成を受けた研究成果の一部である。

―たにがま　ひろのり・法学部専任講師―